

[B年]復活節第2主日(2022年4月24日)**【旧約聖書日課】民数記 13章1～2節、17～33節**

1主はモーセに言われた。2「人を遣わして、わたしがイスラエルの人々に与えようとしているカナン土地を偵察させなさい。父祖以来の部族ごとに一人ずつ、それぞれ、指導者を遣わさねばならない。」

17モーセは、彼らをカナン土地の偵察に遣わすにあたってこう命じた。「ネゲブに上り、更に山を登って行き、18その土地がどんな所か調べて来なさい。その土地の住民が強いのか弱いのか、人数が多いか少ないか、19彼らの住む土地が良いか悪いか、彼らの住む町がどんな様子か、天幕を張っているのか城壁があるのか、20土地はどうか、肥えているかやせているか、木が茂っているか否かを。あなたたちは雄々しく行き、その土地の果物を取って来なさい。」それはちょうど、ぶどうの熟す時期であった。21彼らは上って行って、ツインの荒れ野からレボ・ハマトに近いレホブまでの土地を偵察した。22彼らはネゲブを上って行き、ヘブロンに着いた。そこには、アナクの子孫であるアヒマンとシェシャイとタルマイが住んでいた。ヘブロンはエジプトのツォアンよりも七年前に建てられた町である。23エシュコルの谷に着くと、彼らは一房のぶどうの付いた枝を切り取り、棒に下げ、二人で担いだ。また、ざくろやいちじくも取った。24この場所がエシュコルの谷と呼ばれるのは、イスラエルの人々がここで一房(エシュコル)のぶどうを切り取ったからである。

25四十日の後、彼らは土地の偵察から帰って来た。26バランの荒れ野のカデシュにいるモーセ、アロンおよびイスラエルの人々の共同体全体のもとに来ると、彼らと共同体全体に報告をし、その土地の果物を見せた。27彼らはモーセに説明して言った。「わたしたちは、あなたが遣わされた地方に行って来ました。そこは乳と蜜の流れる所でした。これがその果物です。28しかし、その土地の住民は強く、町という町は城壁に囲まれ、大層大きく、しかもアナクの子孫さえ見かけました。29ネゲブ地方にはアマレク人、山地にはヘト人、エブス人、アモリ人、海岸地方およびヨルダン沿岸地方にはカナン人が住んでいます。」

30カレブは民を静め、モーセに向かって進言した。「断然上って行くべきです。そこを占領しましょう。必ず勝てます。」31しかし、彼と一緒にいった者たちは反対し、「いや、あの民に向かって上って行くのは不可能だ。彼らは我々よりも強い」と言い、32イスラエルの人々の間に、偵察して来た土地について悪い情報を流した。「我々が偵察して来た土地は、そこに住み着こうとする者を食いつくすような土地だ。我々が見た民は皆、巨人だった。33そこで我々が見たのは、ネフィリムなのだ。アナクはネフィリムの出なのだ。我々は、自分がいなごのように小さく見えたり、彼らの目にもそう見えたりしない。」

【使徒書日課】コリントの信徒への手紙二 4章7～18節

7ところで、わたしたちは、このような宝を土の器に納めています。この並外れて偉大な力が神のものであって、わたしたちから出たものでないことが明らかになるために。8わたしたちは、四方から苦しめられても行き詰まらず、途方に暮れても失望せず、9虐げられても見

捨てられず、打ち倒されても滅ぼされない。10わたしたちは、いつもイエスの死を体にまもっています。イエスの命がこの体に現れるために。11わたしたちは生きている間、絶えずイエスのために死にさらされています。死ぬはずのこの身にイエスの命が現れるために。12こうして、わたしたちの内には死が働き、あなたがたの内には命が働いていることになります。13「わたしは信じた。それで、わたしは語った」と書いてあるとおり、それと同じ信仰の霊を持っているので、わたしたちも信じ、それだからこそ語ってもいます。14主イエスを復活させた神が、イエスと共にわたしたちをも復活させ、あなたがたと一緒に御前に立たせてくださると、わたしたちは知っています。15すべてこれらのことは、あなたがたのためであり、多くの人々が豊かに恵みを受け、感謝の念に満ちて神に栄光を帰すようになるためです。

16だから、わたしたちは落胆しません。たとえわたしたちの「外なる人」は衰えていくとしても、わたしたちの「内なる人」は日々新たにされていきます。17わたしたちの一時の軽い艱難は、比べものにならないほど重みのある永遠の栄光をもたらしてくれます。18わたしたちは見えるものではなく、見えないものに目を注ぎます。見えるものは過ぎ去りますが、見えないものは永遠に存続するからです。

【福音書日課】ヨハネによる福音書 20章19～31節

19その日、すなわち週の初めの日の夕方、弟子たちはユダヤ人を恐れて、自分たちのいる家の戸に鍵をかけていた。そこへ、イエスが来て真真中に立ち、「あなたがたに平和があるように」と言われた。20そう言って、手とわき腹とをお見せになった。弟子たちは、主を見て喜んだ。21イエスは重ねて言われた。「あなたがたに平和があるように。父がわたしをお遣わしになったように、わたしもあなたがたを遣わす。」22そう言ってから、彼らに息を吹きかけて言われた。「聖霊を受けなさい。23だれの罪でも、あなたがたが赦せば、その罪は赦される。だれの罪でも、あなたがたが赦さなければ、赦されないまま残る。」

24十二人の一人でディディモと呼ばれるトマスは、イエスが来られたとき、彼らと一緒にいなかった。25そこで、ほかの弟子たちが、「わたしたちは主を見た」と言うので、トマスは言った。「あの方の手に釘の跡を見、この指を釘跡に入れてみなければ、また、この手をそのわき腹に入れてみなければ、わたしは決して信じない。」26さて八日の後、弟子たちはまた家の中におり、トマスも一緒にいた。戸にはみな鍵がかけてあったのに、イエスが来て真真中に立ち、「あなたがたに平和があるように」と言われた。27それから、トマスに言われた。「あなたの指をここに当てて、わたしの手を見なさい。また、あなたの手を伸ばし、わたしのわき腹に入れなさい。信じない者ではなく、信じる者になりなさい。」28トマスは答えて、「わたしの主、わたしの神よ」と言った。29イエスはトマスに言われた。「わたしを見たから信じたのか。見ないのに信じる人は、幸いである。」

30このほかにも、イエスは弟子たちの前で、多くのしるしをなさしたが、それはこの書物に書かれていない。31これらのことが書かれたのは、あなたがたが、イエスは神の子メシアであると信じるためであり、また、信じてイエスの名により命を受けるためである。

「聖書協会共同訳」(2018年版)読み比べ

民数記 13章1～2節、17～33節

1主はモーセに告げられた。2「人を遣わして、私がイスラエルの人々に与えようとしているカナン地の偵察させなさい。父祖の部族ごとに一人ずつ、彼らのうちの指導者を遣わしなさい。」

17モーセは次のように彼らに命じ、カナン地の偵察に遣わした。「ネゲブに行き、さらに山を登って、18その地がどのような所か偵察しなさい。そこに住む民が強いかわるか、人数が少ないか多いか、19彼らの住む地が良いか悪いか、彼らの住む町はどうか、天幕を張っているのか城壁があるのか、20土地はどうか、肥えているか痩せているか、木があるかないかを調べなさい。あなたがたはひるむことなく、その地の果物を取って来なさい。」季節はちょうど、ぶどうの熟し始める時期であった。21彼らは上って行き、ツインの荒れ野から、レボ・ハマトに近いレホブまで、その地を偵察した。22彼らはネゲブを上って行き、ヘbronに着いた。そこには、アナクの子孫であるアヒマンとシェシャイとタルマイがいた。ヘbronはエジプトのツォアンよりも七年前に建てられた町である。23彼らはエシュコルの谷まで行き、一房のぶどうの付いた枝を切り取り、棒で担いで二人で運んだ。また、ざくろといちじくも取った。24この場所は、イスラエルの人々が切り取った一房のぶどうにちなんで、エシュコル(「一房」の意)の谷と呼ばれた。

25四十日の後、彼らはその地の偵察から戻り、26パランの荒れ野のカデシュにいたモーセ、アロン、およびイスラエル人の全会衆のもとに帰って来た。彼らは二人と全会衆に報告し、その地の果物を見せ、27モーセに説明した。「私たちは、あなたがお遣わしになった地に行ってきた。そこはまことに乳と蜜の流れる地でした。これがその果物です。28しかしながら、その地に住む民は強く、町は城壁に囲まれ、とても大きいのです。私たちはそこでアナクの子孫さえも見ました。29ネゲブ地にはアマレク人が住み、山地にはヘト人、エブス人、アモリ人が住み、海辺とヨルダンの岸辺には、カナン人が住んでいます。」

30カレブは民を静め、モーセに向かって、「私たちはぜひとも上って行くべきです。そこを手に入れましょう。私たちには必ずできます」と言った。31だが、彼と一緒にいった者たちは、「いや、あの民に向かって上ることなどできません。彼らは私たちよりも強いからです」と言い、32偵察した地について、イスラエルの人々の間に悪い噂を広めて言った。「私たちが偵察のために行き巡った地は、そこに住もうとする者を食い尽くす地だ。私たちがそこで見た民は皆、巨人だった。33私たちはそこでネフィリムを見た。アナク人はネフィリムの出身なのだ。私たちの目には自分がばったのように見えたと、彼らの目にもそう見えただろう。」

コリントの信徒への手紙二 4章7～18節

7私たちは、この宝を土の器に納めています。計り知れない力が神のものであって、私たちから出たものでないことが明らかになるためです。8私たちは、四方から苦難を受けても行き詰まらず、途方に暮れても失望せず、

9迫害されても見捨てられず、倒されても滅びません。10私たちは、死にゆくイエスをいつもこの身に負っています。イエスの命がこの身に現れるためです。11私たちは生きている者は、イエスのために絶えず死に渡されています。イエスの命が私たちの死ぬべき肉体に現れるためです。12こうして、私たちの内には死が働き、あなたがたの内には命が働くのです。13「私は信じた。それゆえに語った」と書いてあるとおり、それと同じ信仰の霊を持っているので、私達も信じ、それゆえに語ってもいるのです。14主イエスを復活させた方が、イエスと共に私たちをも復活させ、あなたがたと共に御前に立たせてくださると、私たちは知っています。15すべてのことはあなたがたのためであり、こうして、恵みがますます多くの人に及んで、感謝を満ち溢れさせ、神に栄光となるのです。

16だから、私たちは落胆しません。私たちの外なる人が朽ちるとしても、私たちの内なる人は日々新たにされていきます。17このしばらくの軽い苦難は、私たちの内に働いて、比べものにならないほど重みのある永遠の栄光をもたらしてくれます。18私たちは、見えるものではなく、見えないものに目を注ぎます。見えるものは一時的であり、見えないものは永遠に存続するからです。

ヨハネによる福音書 20章19～31節

19その日、すなわち週の初めの日の夕方、弟子たちは、ユダヤ人を恐れて、自分たちのいる家の戸にはみな鍵をかけていた。そこへ、イエスが来て真ん中に立ち、「あなたがたに平和があるように」と言われた。20そう言って、手と脇腹とお見せになった。弟子たちは、主を見て喜んだ。21イエスは重ねて言われた。「あなたがたに平和があるように。父が私をお遣わしになったように、私もあなたがたを遣わす。」22そう言ってから、彼らに息を吹きかけて言われた。「聖霊を受けなさい。23誰の罪でも、あなたがたが赦せば、その罪は赦される。誰の罪でも、あなたがたが赦さなければ、赦されないまま残る。」

24十二人の一人でディディモと呼ばれるトマスは、イエスが来られたとき、彼らと一緒にいなかった。25そこで、ほかの弟子たちが、「私たちは主を見た」と言うと、トマスは言った。「あの方の手に釘の痕を見、この指を釘跡に入れてみなければ、また、この手をその脇腹に入れなければ、私は決して信じない。」26八日の後、弟子たちはまた家の中におり、トマスも一緒にいた。戸にはみな鍵がかけあつたのに、イエスが来て真ん中に立ち、「あなたがたに平和があるように」と言われた。27それから、トマスに言われた。「あなたの指をここに当てて、私の手を見なさい。あなたの手を伸ばして、私の脇腹に入れなさい。信じない者ではなく、信じる者になりなさい。」28トマスは答えて、「私の主、私の神よ」と言った。29イエスはトマスに言われた。「私を見たから信じたのか。見ないで信じる人は、幸いである。」

30このほかにも、イエスは弟子たちの前で、多くのしるしをなさったが、それはこの書物に書かれていない。31これらのことが書かれたのは、あなたがたが、イエスは神の子メシアであると信じるためであり、また、信じてイエスの名により命を受けるためである。

黙想のためのノート**次主日教会暦と聖書日課について**

・4月24日「復活節第2主日」の日課主題は「復活顕現」。「復活日(イースター)」から始まる「復活節」は、「聖霊降臨日(ペンテコステ)」前まで(カトリック教会では聖霊降臨日当日まで)七週間続く。この期間は、ユダヤ教の「過越祭」から「七週祭」までの期間に基づいて定められてきた。すなわち、「復活日(イースター)」は「過越祭」のキリスト教的解釈、「聖霊降臨日(ペンテコステ)」は「七週祭」のキリスト教的解釈として記念されてきた。この期節中、伝統的には、第3主日までは「主イエス復活顕現伝承」が福音書日課として置かれ、第4主日には「良い羊飼いきリスト」が、第5～7主日には「最後の晩餐」以降に語られた主イエスの教えが扱われる。日本基督教団の聖書日課は、基本的にこの伝統に従っているが、年によって設定に多少の相違がある。なお、伝統的な聖書日課では、旧約聖書日課に相当する日課(第一朗読)として「使徒言行録」が連続して選ばれている。

・福音書日課は、「ヨハネによる福音書」から、復活日および八日目の弟子たちの集まる閉じられた家における主イエス復活顕現伝承の箇所。旧約聖書日課は、「民数記」から、シナイ契約後一年目のイスラエルの民が、神から約束の地への進入を示されて偵察隊を派遣したことを物語る箇所から。使徒書日課は、「コリントの信徒への手紙二」から、「土の器に納める宝」のたとえで復活信仰が教えられる箇所。

旧約日課(民数記13章より)

・「民数記」は、ユダヤ教正典「律法」の第四の書で、「モーセ物語」の第3巻に相当、エジプト脱出二年目第二の月から始まり、最初のカナン侵入の挫折を経てモアブの荒れ野に長期逗留するまでの出来事が物語られる。「民数記」の呼称は、七十人訳ギリシア語旧約聖書(「アリスモイ」=「数」の複数形)に付された呼称から来ており、冒頭に「人口調査」の逸話が置かれていることによるが、ヘブライ語聖書では「ベミドバル(荒れ野にて)」の標題で呼ばれる。

・日課箇所は、エジプトを出発して二年目に死海(塩の海)西側からカナン地方に侵入すべく偵察隊を送った際の出来事を物語る。「カナン」は、地中海最奥の地域を広く指す呼称で、フェニキア地方の人々も自称「カナン人」。メソポタミア地方とエジプトを結ぶ通商の要衝路に位置し、古くから都市国家が各地に成立していた。荒れ野生活を経てカナン地方に入るといことは、定住地を得るというだけではなく、新しい生活様式を始めることも意味した。つまり、フェニキア人らが牽引した貨幣経済を主軸とした生活様式を全面的に取り入れるということ。

・偵察隊の中で「カレブ」のほかに「ヨシュア」も、このときのカナン進入をモーセに進言したとされる。「カレブ」はユダ族の代表、「ヨシュア」はエフライム族の代表として偵察隊に加わった。ヨシュアはモーセの後継者。

使徒書日課(Ⅱコリント4章より)

・「コリントの信徒への手紙二」は、使徒パウロが自ら創設に関わったコリント教会に宛てて記した一連の手紙の一つ。コリントは、コリントス地峡に位置する地中海貿易において主要な港湾都市の一つで、ユダヤ人追放令が発せられていたローマ市から一時的に退避して来ていたユダヤ人を含めて、ディアスポラ系ユダヤ人の大きなコミュニティが存在した。パウロは、アテネ宣教が不調に終わった後、コリントに移動し、当時ローマから避難してきていたユダヤ人夫妻アキラとプリスキラの家に身を寄せながら、同地のユダヤ会堂に出入りし、宣教・教会共同体の創設・形成を進めた。おそらくアキラとプリスキラ夫妻は、すでに教会形成が始まっていたローマ教会のメンバーであったと考えられ、彼らのような「使徒の教えに基づいて主イエスの教えと実践に生きるユダヤ人グループ」に連なる者たちを核にして、コリントの教会共同体が始められたのだろう。いずれにしても、ディアスポラ系ユダヤ人の中でも移動性の高いユダヤ人らを核に始められたコリントの教会には、自由な雰囲気が強かったと考えられ、パウロだけでなく、ペトロ(ケファ)やアポロなど当時著名な指導者を仰ぐ教会内グループが存在していたと考えられる。そのような共同体メンバーの中には、パウロの指導性を否定し、関係が悪化した者たちもあつたと推認される。「手紙一」は、コリント教会との関係が悪化し始めた初期に、パウロの基本的な立ち位置を示すために著され、送られた書簡であったが、「手紙二」は、破綻しかけた関係がどうにか最悪の状態を回避して関係を回復し始めた時期に記されたものと考えられる。

・日課箇所は、コリントの教会共同体の人々と関係を回復し和解を確かなものとするために、パウロ自身、抑制的に、むしろ謙虚な姿勢を強く示しつつ、和解の根拠となるキリストの出来事に目を向けさせようとしている。「土の器」の比喻などは、そのようなパウロの姿勢を示すものである。

・16節「外なる人(エクソ)」「内なる人(エソ)」は、他の「パウロ書簡」ではもっぱら、「外部の人」「内部の人」の意で用いられている用語(Ⅰコリ5:12,13、コロ4:5、Ⅰテサ4:12。ただし、「エソ」は、ロマ7:22およびエフエソ3:16で「内なる人」と訳されている)。パウロが元来、「内なる人」と「外なる人」という二元論的人間観に基づいて自分の神学を構築していたとは考えられず、おそらく、ギリシア思想に親しんでいる人々に向けて「霊肉二元論的人間観」を援用して語ってみせているのだろう。日課箇所、パウロは、「宝」としての「キリスト」が「土の器」に過ぎない人間の中に納まってくださるというイメージで語ってきたため、「土の器」に相当する「外なる人」と、「キリスト」を受け入れた「内なる人」が区別される。パウロは元来一体不可分な「体」をイメージとする人間観に基づいて、あらゆる意味で「キリスト」との一体化を語っている(フィリ1:21など参照)。

福音書日課(ヨハネ 20 章より)

・日課箇所は、「週の初めの日」に弟子たちの集団に対して現れた復活のイエスの出来事を伝える復活顕現伝承で、二週にわたる出来事として伝えられている。弟子たちの集団の中に復活のイエスが現れるという復活顕現伝承は、「マタイ」「ルカ」でも同様に伝えられているが、それぞれに出来事の状態設定が異なる。復活顕現伝承は、「パウロ書簡」でも伝えられており(Ⅰコリ 15:3~8)、これがより初期の教会で定式化された復活顕現伝承であったと考えられる。つまり、復活顕現は、最初に「ケファ(ペトロ)」に起こり、次に「十二人」に、そしてその他多くの弟子たちに、という展開である。しかし、四福音書は共通して、復活顕現の出来事の発端を、空の墓における女の弟子(マグダラのマリア)に対する出来事として描いている。おそらく、ペトロ自身が、女の弟子たちに対する復活顕現が先行したことを証言することによって、福音書成立時期には、福音書で共通して伝えられるような「空の墓における女の弟子に対する復活顕現」が定式化したのだろう。

・日課箇所は、二週にわたる「週の初めの日」の出来事として描かれる。それは、「週の初めの日」が「弟子たちに対する復活顕現を記念する日」とされていた原因譚としての意味合いがあるのだろう。しかし、それは「ヨハネ福音書」が編纂される際に二次的に利用されたことであって、復活顕現伝承としては、「トマス」の逸話を伝えることが物語の核である。「トマス」は、「ヨハネ福音書」で繰り返し登場する(11:16、14:5)。

・29 節「見ないのに信じる人は、幸いである」は、「見る」ことによる信仰を否定していない。「ヨハネ福音書」はむしろ、「しるし」を見ることによる客観的な信仰を推奨している(1:50、3:3、4:35、12:45、14:19 等)。

来週の誕生日 (4月24日~30日)**主日礼拝の讃美歌から**

・21-329 番「目覚めよ、歌えよ」は、18 世紀英国のジャーナリスト・スマートの作詞。18 世紀英国の国教会司祭ホイスの原曲を音楽家サミュエル・ウェップ Jr が讃美歌用に整えた曲と組み合わせられている。

・21-333 番「主の復活、ハレルヤ」は、20 世紀後半のタンザニア・ルター派牧師キヤマニワがスワヒリ語で作詞しハヤ族の伝統的旋律を付して発表。原曲は結婚式における宗教儀式で歌われる舞踏歌。ルター派でドイツ語に訳され広く知られるようになった。

・21-453 番「何ひとつ持たないで」、現代オランダの元カトリック司祭で独立教会「エクレジア」を主宰する H.オースターハウスの作詞したオランダ語歌詞。曲は、カトリック司祭 B.M.ハウベルスがこの歌詞のために作曲。

・21-92 番「主よ、わたしたちの主よ」は、『讃美歌 21』編纂に合わせて実施された公募により生まれた讃美歌。礼拝に呼び集められた「わたしたち」がこの世へと遣わされる者とされていることを歌う。作詞の佐久

本正志は、沖縄出身の教団牧師。作曲の鈴木千恵子はカンバーランド長老教会高座教会員の音楽家。

21-329「目覚めよ、歌えよ」**Awake, arise, lift up your voice**

1. Awake, arise, lift up your voice, / let Easter music swell; / rejoice in Christ, again rejoice, / and on his praises dwell.
2. Oh, with what gladness and surprise / the saints their Saviour greet; / nor will they trust their ears and eyes / but by his hands and feet:
3. those hands of liberal love indeed / in infinite degree, / those feet still free to move and bleed / for millions and for me.
4. His enemies had sealed the stone / as Pilate gave them leave, / lest dead and friendless and alone / he should their skill deceive.
5. O Dead arise! O Friendless stand / by seraphim adored! / O Solitude again command / your host from heaven restored!

21-333「主の復活、ハレルヤ」**Mfurahini, haleluya****English Translation**

1. Christ has arisen, alleluia. / Rejoice and praise Him, alleluia. / For our Redeemer burst from the tomb, / Even from death, dispelling its gloom.
Refrain: Let us sing praise to Him with endless joy; / Death's fearful sting He has come to destroy. / Our sin forgiving, alleluia! / Jesus is living, alleluia!
2. For three long days the grave did its worst / Until its strength by God was dispersed. / He who gives life did death undergo; / And in its conquest His might did show. / (Refrain)
3. The angel said to them, "Do not fear! / You look for Jesus who is not here. / See for yourselves the tomb is all bare; / Only the grave cloths are lying there." / (Refrain)
4. "Go spread the news: He's not in the grave; / He has arisen this world to save. / Jesus' redeeming labors are done; / Even the battle with sin is won." / (Refrain)
5. Christ has arisen; He sets us free; / Alleluia, to Him praises be. / Jesus is living! Let us all sing; / He reigns triumphant, heavenly King. / (Refrain)

21-453「何ひとつ持たないで」**Ik sta voor U**

1. Ik sta voor U in leegte en gemis, / vreemd is uw naam, onvindbaar zijn uw wegen. / Zijt Gij mijn God, sinds mensenheugenis, / dood is mijn lot, hebt Gij geen and're zegen? / Zijt Gij de God bij wie mijn toekomst is? / Heer, ik geloof, waarom staat Gij mij tegen?
2. Mijn dagen zijn door twijfel overmand, / ik ben gevangen in mijn onvermogen. / Hebt Gij mijn naam geschreven in uw hand, / zult Gij mij bergen in uw mededogen? / Mag ik nog levend wonen in uw land, / mag ik nog eenmaal zien met nieuwe ogen?
3. Spreekt Gij het woord dat mij vertroosting geeft / dat mij bevrijdt en opneemt in uw vrede. / Open die wereld die geen einde heeft, / wil alle liefde aan uw zoon besteden. / Wees Gij vandaag mijn brood zowaar Gij leeft. / Gij zijt toch zelf de ziel van mijn gebeden.